2013年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告書

■研究・実践の課題（テーマ）

褥瘡における創部の状態と微量元素（鉄、亜鉛、銅）との関連性について

■主任研究者　山中　克己

■共同研究者　大西　山大

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

当施設の管理栄養士と議論を重ねたが、今年度のみで本研究課題に取り組み、立証していくのは困難であり、軌道修正が必要であると判断した。

日本静脈経腸栄養学会や日本褥瘡学会において、近年、褥瘡における栄養管理は、適切な蛋白質の摂取の必要性を提唱している。

加えて、最近のトピックスとして、褥瘡合併症例では、分岐鎖アミノ酸を摂取することが治療の上でも有効であるという見解が散見されるようになってきた。

高齢者では、蛋白質、とくにアルギニンに特化した栄養管理が良いとの見解が聞かれるが、褥瘡合併症例におけるアミノ酸の中でもとくにアルギニンが、果たして本当に特異的に低下しているのか否かを検証する必要がある。

上記課題を検証する前に、今年度は当施設に入所している褥瘡を有しない高齢者で、総蛋白、アルブミン、血中のアミノ酸分画を測定する。その結果、本年度の新たな研究課題として、「高齢者における蛋白質、とくにアルギニン値の低下に関する検討」に取り組むこととした。なお、本研究は、2014年1月31日、本学の研究倫理審査委員会に申請し、承認された研究課題である（承認番号：92）。

研究目的：褥瘡を有しない高齢者において血液検査を実施し、総蛋白、アルブミンとアミノ酸（とくに、アルギニン）との因果関係を検証することが目的である。

方法：本研究の実施にあたり、説明文書に基づき十分に説明を行ない、同意を得た当施設に入所している65歳以上の高齢者で血液検査を実施した（男性：2名、女性：4名）。

結果：対象者は81～100歳までの計6名。総蛋白値が低下した者はいなかった。アルブミン値が低下した者は3名（男性：1名、女性：2名）であった。アルギンニンが低下していた者は2名（男性：1名、女性：1名）であった。アルブミン、アルギニンともに低下した者はいなかった。

提案：現時点では、臨床実験を行なった人数が6名と少なく、最終結果とは言い難い。従って、目標として、来年度は30～50名程度へと対象者を拡大したいと考えている。